2012年度経営者「環境力」大賞

きょう顕彰式と発表会

経営と環境との一体化を目指して

環境文明21は2008年度から環境と経営の持続可能な一体化を目指している。今年度は5回目。昨年度からは日刊工業新聞社も主催者として顕彰制度の普及に尽力している。協賛は日本環境認証機構、西武信用金庫、損保ジャパン環境財団、住友生命保険。きょう13時半から東京渋谷区のアイビーホールで顕彰式と発表会を行う。

地球環境への対応が重大な課題と世界的に認識されて久しい。環境文明21は「企業が社会と共生しながら持続可能な経営を行うために、全ての企業関係者が経営と環境との一体化を目指す」のが重要だと語る。

00年先を見通した企業価値を設定し、その価値を浸透させる情熱と達成する戦略性③国内外の時代の潮流を洞察し、先取りする力④他社とも協働して、社会に対する責任を果たそうとする意思⑤働くことの価値を認め、自社で働く全ての人々の働く意欲を高める力⑥地域社会との交流を大切にし、その伝統や文化を尊重する意思⑦経済と環境を一体化しようとする意思⑧事業を大きくしすぎない美意識⑨科学を理解し、経営に活かす力⑩技術動向を常に把握し、経営の発展に繋げる力⑪人知の及ばない大いなるものへの畏敬の念⑫NPOを含む全てのステークホルダーとコミュニケーションをとる力―これらの条件を満たす経営者に与えられる、名誉ある賞である。

12年度の受賞者は9人。カネパッケージの金坂良一社長は「梱包」が持つ、環境に負荷がかかるという悪いイメージの脱却を目指し、独自の技術開発により、梱包材や荷物の縮小化による輸送量の減少などに取り組む。注目は売り上げの0・1%をマングローブ植林事業費として当てている点。当初株主から反対されたが、ねばり強い交渉の末、事業を継続している。

東海サーモエンジニアリングの鳥羽益男社長は、空調業界の中でも早い段階で「フロン」の危険性を認識。企業としてフロンを使用せざるを得ない立場から、率先して回収に取り組むとともに、空調業界を取りまとめて「静岡県フロン回収協会」を設立するに至る。また、技術の伝承に重きを置き、働ける社員には雇用期限を設けず、定年退職を廃止した。

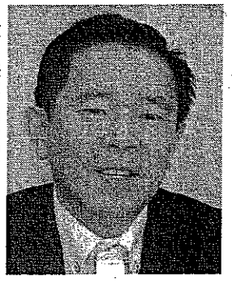
サンテックの日野榮社長はトップダウンで会社全体を省エネ仕様に変革。自社内で徹底的なエコ活動を促進しているとして奨励賞を受賞した。

このほか、大川印刷の大川哲郎社長、新和環境の近藤晃介社長、グリーンアルの谷學社長、大里緑合管理の野老真理子社長、北陽商会の山崎保彦社長が大賞を受賞。また、奨励賞としてカネコ工業の金子正平社長が受賞した。

12年度もあと半月。11年3月11日に発生した東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所での事故から2年が経過し、国民の記憶から遠くなる現在、われわれの生活と「環境」との密接な関係を改めて見つめ直すとともに、これまでの快適さ、利便性、経済性などの社会活動に疑問を持って立ち返ってほしい。受賞した9人の経営姿勢に学ぶことは多い。

受賞者　喜びの声

大賞



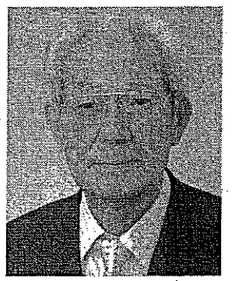
カネパッケージ社長
金坂 良一氏

梱包材減容、植林にも力

今回、経営者「環境力」大賞を受けることができ、誠に望外の喜びと言えます。当社は梱包材の製造販売を手がけております。ご存じのように梱包材というのは、発泡スチロールも段ボールもいったん積み荷を解いた後、その処分に手を焼くものです。特に、発泡スチロールはかさばります。

当社ではこうした課題に対し、1990年代から取り組んで来ました。フィリピンなど海外の顧客工場から梱包材を回収して減容・リサイクルを行ってきました。2010年には、フィリピンで国の自然保護区となっている島々のラグーンに対し、ボランティアでマングローブの植林事業を開始。当社従業員が現地の方の協力を得ながら、これまで累計で260万本超の植林を行ってきました。

こうした活動について、当社では年商の0・1%を、利益の有無にかかわらず当てています。今後は同活動をNPO法人化し、微力ながらも地球環境のカーボンオフセットに向けた寄与を進めて参ります。



東海サーモエンジニアリング社長
鳥波 益男氏

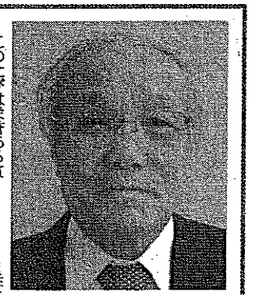
フロン取扱業者の責務

このたびは名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。当社は1968年に冷凍空調設備工事業者として創業し、以来45年の実績を重ねております。

当該設備には冷媒としてフロンガスを用いています。フロンは1930年に発明された人工的化学物質で、有能で安定した夢の化学物質として大量に利用されていました。特に近年の食文化・住環境の進化、産業の近代化はフロンの功績が非常に大きいのですが、74年に「フロンはオゾン層の破壊・地球温暖化に大きく影響する」と指摘され、以後モントリオール議定書、京都議定書によりフロンの大気排出が抑制されています。

私はフロン取扱業者の責務を果たすべく、94年に県内の同業者115社とともにフロン回収事業協会を設立、協働して回収・処理のインフラの整備、漏えい排出削減対策を業界の自主行動として取り組んでいます。今後とも環境モデルの先駆けとなり、社会に貢献していく所存です。

奨励賞



サンテック社長
日野 榮氏

自然と共存できる工場

このたびは栄誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。四季を肌で感じることのできる街・東京都瑞穂町にサンテックの本社はあります。当社では瑞穂町の豊かな自然に配慮した地域環境づくりを推進しております。

2004年11月に環境管理・監査の国際規格「ISO14001」の認証を取得。

07年には工場内で使用する純水のリサイクル装置を導入し、95%のリサイクル率を実現しました。

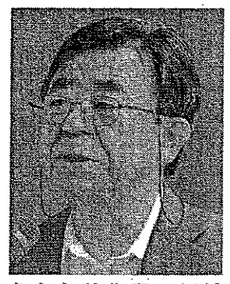
11年には工場、事務所全ての蛍光灯を発光ダイオード（LED）に切り替えました。

さらに昨年10月には本社工場屋上に設置した太陽光パネルを稼働して電力ピークを抑制し、総使用量の10%を補っています。

今後ともダイシング（切削）加工の事業活動を通じて、私たちの技術力を有効活用し、自然と企業が共存できる潤いと豊かさをもった優しい環境社会づくりに努めて参ります。

講評

環境文明21　共同代表　加藤 三郎氏



経営者「環境力」大賞顕彰事業も今回で第5回となりました。全国各地で「環境力」を発揮している、ひときわユニークな7人の経営者を顕彰できたことは喜びであり、光栄でもあります。また今回は審査員全員の総意で、大賞には一歩及ばなかったものの、地域で頑張っておられる2人の経営者に、奨励賞を差し上げることとしたのも大きな特色です。

東日本大震災後の2年間、原発問題や電力不足問題に世間の関心は集中している印象が強いですが、世界各地での異常気象の頻発や生き物の絶滅危惧などが示すように、すべての生命と経済活動の基盤である地球環境は、極めて厳しい状況に陥りつつあります。

それゆえに、国も国際社会も環境対策を強化しつつあるので、当然企業活動に対しても、ある種の制約が生じます。しかし、その制約をマイナスではなく、むしろチャンスと捉える経営者も少なからずいます。すなわち、環境への取り組みを通して負荷を削減し、資源効率を高め、コスト削減や効率向上につなげることで、事業の持続性を高める力「環境力」に注目する経営者です。

私は10年前から「環境力」という言葉を使い始めましたが、それは企業が環境を維持・改善しようと本気で尽力すると、経済面や倫理面双方を高める力があることを「発見」したことによります。今回の受賞者はそのことを雄弁に物語っているのが喜ばしいです。

今回の受賞者が今後とも存分にご活躍されることを心から祈念しております。

制約をチャンスと捉えて

ごあいさつ

日刊工業新聞社社長　井水 治博

2012年度経営者「環境力」大賞の受賞者の皆さまに心よりお祝いを申し上げます。企業経営を通じ、持続可能な社会の実現に向け多大なる貢献をされておられる皆さまに敬意を表します。

昨年、ブラジル・リオデジャネイロで開催された「国連持続可能な開発会議（リオ+20）」では、環境問題の解決と、経済発展による貧困撲滅の両方を促進する「グリーン経済」への移行に世界各国が合意しました。先進国と新興国の主張の違いなどはありますが、経済活性化と持続可能な社会の両立が重要である点は共通認識は世界共通となっています。

「グリーン経済」へ移行を

個別の企業にもグリーン経済への対応が求められます。持続可能な社会の実現に貢献しながら、事業を発展させ企業を存続させていかなければなりません。いま世界が直面しているグリーン経済への転換期は、これまでにも増して経営者の力量が問われる時代といえます。

本賞を受賞された方々は、環境保全や持続可能な社会の構築に向け、明確な理念を持ち、社内外の関係者としっかり連携し、地域に根ざした活動をしておられます。その結果、地域や各業界において「なくてはならない存在」になっています。

グリーン経済への移行という大きな変革に挑み、成果を上げている経営者を広く世に知らしめる本賞の意義は今後ますます大きくなります。引き続き関係各位のご支援、ご協力をお願い申し上げます。